

スペイン語圏を知る本 (その55)

伊集院静著 『美の旅人：スペイン編 I, II, III』

(小学館、2009-2010年)

評者 坂東 省次

作家伊集院静のスペイン美の旅は、最初、『週刊ポスト』（1998年11月13日号-2000年3月31日号）に連載され、後に加筆して再構成されて単行本『美の旅人』（小学館、2005年）として上梓され、この度、文庫本（全三巻）で出版されることになった。『美の旅人：スペイン編Ⅰ』ではフランシスコ・デ・ゴヤとエル・グレコを、『美の旅人：スペイン編Ⅱ』ではサルバドール・ダリを、そして『美の旅人：スペイン編Ⅲ』ではミロを主として扱っている。

伊集院は絵が好きだった母親の影響からか、自身も小さい頃から絵が好きで、小説を書く一方で、美の旅人としてスペインやフランスで美術館を訪れ、じつに多くの名画と出会って至福の時を過ごすとともに、その国と人々についても考えてきた。

美の旅人が訪れたのは、スペインの中でもカスティーリャ地方、アラゴン地方そしてカタルーニャ地方であった。伊集院はスペイン美の旅をアラゴン地方から始めている。そこは石と灌木の荒野がひろがり、厳暑厳寒の大地である。そこに住むアラゴン人は極端な頑固者、石よりも固い石頭たち、と呼ばれる。アラゴンの中心都市はサラゴサである。このサラゴサから南に44キロのところ寒村フエンテトドスがある。この地こそスペインを代表する画家フランシスコ・デ・ゴヤ生誕の地なのである。ゴヤは宮廷画家として数多くの王家の肖像画を描いたが、一方でキャンパスにナポレオン戦争でフランス人と戦うスペイン人市民を登場させた。伊集院は「スペイン絵画には聖人、殉教を主題にしたものは多数ある。しかし主役を、スペイン人、すなわち民衆にした画家はゴヤが初めてだ」という。ゴヤが近代画家と言われる所以である。

サラゴサを訪れる日本人は多くはない。しかし、カスティーリャ地方にある古都トレドにはほとんどすべての日本人が訪れるだろう。トレド訪問の目的はもちろん人によってさまざまであるが、何よりもグレコとの出会いを目的にトレドを訪

れる人が圧倒的に多い。伊集院はギリシャ人グレコがトレドに居ついた理由をこう考える。「グレコはこの街で中世ヨーロッパの崇敬すべき人間たちと遭遇し、彼等が命を捧げる神の存在にヒューマニズム（人間性）を発見したのではないだろうか。そう考えるとグレコの描くキリスト像がきわめて人間に近い理由がわかる気がする。」

カタルーニャの首都バルセロナは、画家ピカソ、ダリそしてミロで知られる。ピカソはスペイン南部のマラガ出身であるが、若き時代を過ごしたバルセロナを、故郷と公言しているほどである。一方、ダリもミロもカタルーニャ出身である。ダリは伝統に抵抗する奇異な作品と奇異なパフォーマンスで、20世紀の鑑賞者を驚愕させた。幸い、ダリの生きた20世紀前半は貴族社会からブルジョワ社会に変わろうとする時代であり、そこではダリの奇異な美意識は、まさに新しい美術として歓迎されたのである。それはダリの時代の読みの勝利といえるのかも知れない。伊集院のこぼれ話を借れば、ダリは近代、そして現代が芸術において、基準、基軸というものがないことを早い段階で察知していたのである。

20世紀を代表する画家の中で、ミロが他の画家とあきらかに違っていた点は、彼の並外れた自制心、克己心にあったのではないと思われる、と伊集院は述べている。ミロは、キュビズム、ダダイズム、シュルレアリスムのグループと関係はあったが、それらに決して染まることなく、溺れることなく、自らの世界の創造に邁進した人であったのだ。また、故郷カタルーニャ、フランスはパリ、アメリカはニューヨークそして日本の影響を受けながら、あるいはそれらの地から学びながら、自らの世界の発見に努力して、ついにそれを発見したのであった。スペインの誇る巨匠の運命を比較して考えるのも興味深いかも知れない。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)